

## ヤンゴン素描 43

### 35 ミッターニュン 自動車中古部品の町 山形洋一

幕末開国とほぼ同時代に設計された都市の最前線だった町。

新品・中古自動車部品が取引される動・静脈の結節点。

駅名はパーリ語に由来し、ミッターは「愛、慈愛、慈しみ、愛情」、「アニュン」は「①芽、若芽、新芽 ②頂、尖端」などの意味がある。仮に訳すと、「慈悲新町」とでもなろうか。



ヤンゴン市内の地名には佛教用語が多く使われているが、ティリミヤインでも述べたように、恵まれない人達が吹きだまっているところほど、立派な名前が付けられる傾向がある。

「タームエ」バス停からはこの駅が最も近く、ビルマ人中流層が恐れと軽蔑をこめて小声で語る「タームエ」の暗いイメージが、この駅周辺には色濃くただよっている。

第二次英緬戦争のあとはじまったラングーン都市計画で、ヤンゴン川沿いの「下町」の南北街路には番号がつけられた。西端の1番から東へすすみ、モンキーポイント（猿岬）で74番に達すると、鉄道を北へ渡り、中央駅北側のミンガラータウンニュン町に87番から131番まで振られた。

つづいて北東のタームエ町に移った番号の終点（167番街）にもっとも近い駅がミッターニョンである。このあたりが19世紀半ばの港湾都市ラングーン外れだったのだ。今では建築用資材や大工道具が売られている。

駅のすぐ西に自動車部品の巨大な市場があり経営者の大半はインド系だ。鉄と油の黒い風景はヤンゴン北西の「タマイン・ミョー・ティッ」と酷似している。長円形にのびるヤンゴン環状鉄道が対角線と交わる北西と南東に、自動車修理産業がそれぞれ結節点をもつことは、きわめて合理的だ。

ミッターニョン駅から東に分かれる鉄道を辿ると、ンガモーイエッ・クリークを渡り、トージャウンガレーの工場地帯に行き着く。工場地帯と言っても、ライン町にあるような塀で囲まれた上品な施設ではなく、トタン屋根で覆われた吹き抜けの地面に、鋳物、溶接、その他鉄工所が雑居している。町全体が黒く、鍛造その他の金属音が鳴りやまない。経営者の多くはインド系のようなのだが、労働者にはミャンマー系の顔が多く見られる。

トタン屋根の吹き抜け長屋の一角にある食堂に入ってみた。油と鉄粉で黒く染まった土間は、折から覆いかぶさってきた漆黒の雨雲のせいで真っ暗になり、目をこらしてようやく座る場所を見つけた。何を食っているのか見ただけではわからない。

飯は鶏、豚、魚などの煮込みが一品ついて、一食400チャット。よそなら安くて700ルピーなので、この安さには食って大丈夫だろうかという心配が先に立つ。私が知るかぎりここより安いのは、タダガレーの200チャットぐらいだ。

ただし一食で終るのは私ぐらいで、油と汗で光る筋骨たくましい労働者たちは、お代わり（ライブウェ）した飯の小皿を4枚も5枚も重ねながら、むさぼり食っていた。発禁となった児童書『ちびくろサンボ』のパンケーキの絵が懐かしい。

（了）